

(四国八十八カ所本尊)

日々好日

六六二号

(令和六年四月発行)

朝食後のひと時、新聞に目を通すのが日課となつていますが、二月二十日の中国新聞岩柳版のトップに「周東町の吉岡さん云々」の記事が目にとまりました。大きな写真入りで見覚えのある顔。亡き父の生家を継承している教師を定年退職した古希を経た夫妻である。

記事は二人して幕末の「四境の役」のうち芸州口での幕府軍と長州藩との攻防の詳細を、廿日市、大野、大竹等の住民に聞き取り調査をし、徴古館などの資料にも目を通し双方の軍の配置や戦場などを、事細かに地域ごとにマツプを作製されたというものであった。

佛教界にとつてはその戦役後の明治維新は廃仏毀釈の嵐が吹きすさび、海外にまで軍を進めるなどもろ手をあげて喜べるものではありませんが、当時の世界情勢に対応する国に生まれ変わる四境の役であつたのだと思いつつもその実体を私には知ろうともしませんでした。

今日現在、世界ではロシアとウクライナ、イスラエルとハマスの戦争があり多くの人々が亡くなっています。更に、イギリスやイタリヤと共同開発した戦闘機を第三国に輸出する事案もあります。こうした世情の中で十年もの歳月をかけて果敢に取り組みそれを為しとげた身近な縁者の所為はいろんなことを思い起こさせ、佛国で父も相好を崩しているに違いない。

弘法大師のお言葉

「いやしくもその人にあらざれば談を喉の内に閉ず。実にその器にあらざれば櫃を泉の底に秘す。然うして後に機を見て始めて聞き人を扱んですなわち伝えう」(三教指帰巻中)



日々好日



たけふん



卯月八日の花祭り

「ルンビーニ園はネパール国のルンビーニ州に属し、インドとの国境から然程遠くない田園地帯の中にあります。

樹齢数百年はあるであろう無憂樹（アショカ樹）に抱かれるようにして石垣の基壇の上に白い小さな御堂が建っている。摩耶堂である。

堂の中には、摩耶夫人が無憂樹を手折ろうとされた時に右脇から誕生されたという佛典の記述通りの大小二つの石刻の像が祀られている。

御堂といい石刻像といい、釈尊ご誕生の聖地としての荘厳とは程遠く口惜しいかぎりである。この堂宇の西の

階段脇にアショカ王法勅の石柱の下半分が建

っている。この石柱あるが故にこの地がご誕生の地であると確定されたということでもあります。

堂の南にはプール状の洗浴池がある。佛塔や僧院の遺構もあり僧の姿も見える。

ここは雨が降り止んだばかりの厚い雲が垂れこめているのに、遙か彼方には白雪のヒマラヤ山脈の山々が見渡せま

す。数個の小石を拾って記念としましたが、小鳥のさえずりのほかは寂として物音ひとつしない静かさの中に身をおいて、「天上天下唯我独尊」と宣せられたという故事を思い出しておりました。

釈尊なかりせば我国の宗教も文化も歴史も何もかもが今とは違っており、私自身もいかなる人生を過ごすことになつていたであろうかと思えば感無量のものがあり、釈尊の存在の大きさは御堂の粗末さなど問題にしないで私を包み



込んでしまふ」

これは寺報三百号（平成六年二月）よりの転載ですが、お釈迦様の遺跡を巡拝させていただいたのは、昭和六十年十月六日のことでした。

そのルンビーニ園はご誕生の聖地とはとても思われな

い荒涼たる草原といった佇まいの中にありました。

ご誕生の当時はアショカ樹が咲き草花なども咲く美しい庭園であったのでしよう。今日でも十一月から二月頃までカラシ菜（サルソー）の黄色の花が絨毯を敷き詰めたように咲くという。

それを知るまでもなく、その地に身をおくだけで遙かな昔、二五〇〇年の歳月を経ていればいるほどに想像をたくましくして経典に述べられているご誕生にまつわる様々な瑞祥奇瑞を思いお越して、ある種の戦慄のようなものが身をつつんだことを思い出します

ところがその荒涼としていたルンビーニ園が、現在は著名な建築家丹下健三氏によつてご誕生の聖地にふさわしく整備されていることは、寺報五九〇号（平成三〇年四月）に、インターネット検索で知ったことを述べています。



旧摩耶祠堂
（左にアショカ王の石柱がある）

そこには中国をはじめ東南アジアの佛教国、更にはフランスの寺院まで建てられているという。言うまでもなく我國の寺院もあります。それはお悟りの地ブッダガヤの光景と重なるようにも思えますが、力車に乗っても一日では回りきれない広さだといわれると想像できません。私のインド佛跡巡拝は39年も前のことで44歳の時でした。その折の土産物の中にアショカ王の石柱を模した獅子を冠した木製の円柱があります。



アショカ王は西紀前三世紀半ば頃に古代インド最初の統一国家を建設した国王で、東インドのカリングで敵味方十万人の戦死者を出した戦争の悲惨を知り佛教に帰依したと言われています。

その王が即位二十年後に、釈尊生誕の地として知られていたであろうルンビニーを訪れて建てたといわれる石柱の下半分が、摩耶堂のすぐ前に玉垣を巡らせた中に建っていました。

七世紀半ばにその地を訪れた玄奘三蔵は石柱の上部は馬であったと「大唐西域記」に記しています。その石柱にはルンビニーが釈尊生誕の地であることから地租税を免除するこうしたことなどの法勅文が刻まれていました。アショカ王は釈尊の聖跡にこうした石柱を幾本も建てています。こうしたことをあらかた承知していただきました。成道後の初説法の地サルナート（鹿野園）を訪れた際、参拝したチベット寺院で買い求めたのがこの獅子冠の円柱です。



この獅子柱頭はインドの国章にもなっていますし、獅子の足元の法輪は三色国旗の中央に配されています。アショカチャクラ（法輪）と称されています。

ここで幾つかの経典を繙きながら釈尊ご誕生のことどもをみてみましょう。

【ルンビニーの勝園は流泉あり、花果茂り寂静にして禅思に順う。王に啓して彼に遊ばんことを請う。王はその志願を知り而も奇特の想を生じ、内外の眷属に勅して俱に彼の園林に詣せしむ。

爾の時、摩耶后は自ら産時の至れるを知り、安勝の床に偃寝し百千の女は傳きぬ。時は四月八日、清和の氣調適す。斎戒淨徳で修し菩薩は右脇より生れぬ。大悲世間を救い母をして苦惱せしめず】（略）

【獸王獅子歩をなして四方を觀察し眞実義に通達して能く是の如き説に堪う。

この生を佛生となす
則ち後辺の生となす
吾は唯此の一生にして
一切を度すべし



時に応じて虚空の中より、一は温、一は清涼にして灌頂して身を樂しましむ】
（佛所行讚）

【爾の時の善覺積種大臣（摩耶夫人の父）彼の初二月八日鬼宿の合時に於いて、女摩耶と共に相隨いて彼のルンビ二園に向い往いて大吉祥地を觀看んと欲す。（略）】

其れ菩薩の母は熙怡坦然として安靜歡喜し、身、大樂を受く。是の時、摩耶地に立ち手を以て波羅叉（アショカ樹）の樹枝を執り訖り已りて即ち菩薩を生む。此れは是、菩薩が希奇のこと、未曾有の法なり】

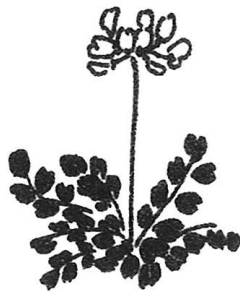
（佛本行集經卷第七）

【爾の時、夫人、彼の園に入り已るに諸根寂靜に十月満足し、二月八日、日の初めて出る時に於いて、夫人、彼の園の中に一大樹の名付けて無憂という有るを見る。

花色香鮮に枝葉分布して極めて茂盛と為す。即ち、右手を挙げて之を索きて摘まんと欲するや、菩薩漸々に右脇より出づ。

時に樹下の七宝の七茎の蓮花を生ず、大きさ車輪の如し。菩薩、すなわち蓮上に隨し扶持する者なくて自ら行くこと七歩し、其の右手を挙げて獅子吼す。

我、一切天人の中に於いて、
最尊最勝なり、無量の生死、
今に於いて尽く。此の生は
一切の人天を利益せん』（略）



難陀龍王、優波難陀龍王、虚空中に於いて清淨の水の一は温、一は涼なるを吐きて太子の身に濯ぎし身は黄金色にして三十二相あり。大光明を放ちて普く三千大千世界を照す】

（過去現在因果經卷第二）

【時に、魔訶摩耶、諸の宮嬪と共に園内に往いて、無憂樹を夢るに芬芳茂盛にして葉を布ね花を開く。即ち右手を以て彼の樹枝をひくに、太子を生まんと欲せるも、諸

の人衆四辺に圍遶するを覩て慚色あるを示す。

天主知り已りて風雨を作し、彼の人衆を四散せしむ】

【四方に於いて各七歩を行く。東方は涅槃の最上な表し、南方は群生を利樂することを表し、西方は生死を解脱することを表し、北方は永く輪廻を断つことを表す。（略）】
諸天は二種を雨し、或いは冷、或いは温きものを降らし
て頂きに濯ぎ沐浴せしむ】（衆許魔訶帝經卷第三）

この他にも方廣大莊嚴經卷第三・誕生品にも誕生時のことどもを諄いくらいに述べられていますが、誕生月日の記述もなく四方に七歩行くも四方の意味付けも異なり、繁雜で理解しがたいほどである。

手元にある幾つかの經典で、お釈迦様のご誕生時の記述部分を取り上げてみました。何れの經典も常人とは異なる仏となる聖なる赤子の誕生を瑞相というか、さまざまな奇瑞を綿々と連ねています。これは經典の常のことではありますが、肝腎の知りたいことが經典によって異なっていたりもします。

しかし、それはどちらが正しいとか誤りであるというようなことではありませぬ。これらを総合的にみて判断をすればいいということなんです。



摩耶祠堂の石像

花御堂の小さな誕生佛に甘茶を濯ぐきつかけになつたであろう誕生時の温・涼二水にしても梵天と帝釈天の二天とするものと難陀龍王など二龍とするものなどの違いがありますし、太子といひ菩薩と表現する赤子を尊い存在だとしていますが、何もかもが大きく様変わりをし、価値観も変わり取り残されるような気にもなりますが、お寺の行事も様変わりを余儀なくしています。



花祭りが一番それを感じます。終戦後のそれは甘いものに飢えた子供たちが手に手に瓶をもって行列をしてみました。毎月のように物価が値上りし子供たちの好む菓子やジュースなども例外ではありませんが、甘茶をあてに寺に入る者はいません。生活苦の度合いが全く違うということです。

これは結構なことですが、子供の出生数が減少の一途なのは心配なことです。バスの減便は運転手不足だということですが、近い将来あらゆる職場で人員不足が確実視されており、政府も各自治体も人口減少に頭を悩ませています。

これは花祭りとはなんの関係はありませんが。誕生という一点からの思いです。お寺の未来も人口減少と無縁ではありません。寺院消滅が宗団の大きな関心事ともなっています。

赤子の出産には産院が頼りですが、岩国では医療センターを除くと七月以降は市内で一院となるといいます。これでは若い人たちが不安を懐かれることとなります。これは早急に解決できることではありませんが、ここにも医師不足、看護師不足の問題があります。

花祭りとは題するなかでこのようなことに言及するのは初めてのことですが、戦争などでかけがえのない尊い宝である赤子が無残な最期をむかえるのを防ぎ得ないのはほんとうに罪深いことである。



高野山奥之院弘法大師御廟前奉納御写経 六四〇

二巻奉納 岩国市装束町四丁目 福島 松代殿

二巻奉納 岩国市南岩国町二丁目 沖本あつ子殿

一卷奉納 岩国市通津 吉岡 律子殿

(二月十一日～三月十日奉納分)

○観音を敬い奇しき報いを得ること

奈良の殖槻寺に近き里に一人の身寄りのない娘がいました。

父母在りし時には家は財に富みいくつも住居や倉を作り、観世音菩薩の銅仏を鑄て庭先に仏殿を建てて像を安置して供養を欠かすことはありませんでした。

聖武天皇の御世に父母は相次いで亡くなり使用人たちも去り、牛馬を飼うもみな死んでしまい、財も尽きて独り空しく宅を守り、昼となく夜となく哀しみ涙して過ごしていました。

女は、観世音菩薩は願うところをよく与えると聞いており、その銅像の御手に繩を繋いで索き燈明を点して福分を願うて言いました。

「私はみなし子にしてただ一人の身を護ることすら叶わない貧しさに耐えて生きています、願くは私に福を施し給え」と。

その里に妻に死に別れた一人暮らしの男がいました。その男は、毎日涙して観音さまに祈っている娘のことを知り、仲人をたてて娘と会いました。

娘は言いました。

「私はとても貧しく着るものにも窮しています・どうして嫁入りなどできましようか」と。

男は言いました。

「そんなことは私もよく知っています。」と言って娘の家に行きました。悪天候もあつて男は娘の家で三日も留ったのです。しかし、その間何も食べ物をくちにしていないのです。

女はどうすることもできず家の中を徘徊するばかりで

したが、ふと気付いて観音様に頼むことにしたのです。「観音さま私にお金を恵んで下さい」と頭を抱えて縋るように祈りました。

しばらくすると誰かが扉を叩いています。出てみると隣家の裕福な婦人が大きな櫃に百味の飲食を納めて立っていました。

婦人は言いました。

「客人ありと聞きました。主人がこれを届けるように言いました。器は後で返して下さい」と。

女は喜んで着ている黒い衣服を脱いで差し出して言いました。

「私にはあなたにお返しに差し上げるものが他にありません。これを受け取つて下さい」と。

隣家の夫人はそれを受け取り身に纏い帰りました。男は飲食の数々を見て怪しみながらも食べて帰りました

驚いたことに翌日には絹十疋、米十俵が届けられたのです。そして、絹は速やかに衣服に仕立て、米は酒を造れと書かれていました。

女はその品々が隣家より届けられたものと思い、お礼にいきました。

すると隣家の夫人は言いました。

「おかしな人ですね、私はそんなことなど何も知りませんよ」と。

女は何がなんだかわからず不思議におもいつつ家に帰り、観音さまを礼拝せんとするに、隣家の婦人に与えた黒い衣服を観音さまが被つておられるではありませんか。女は悟りました。「これらすべては観音さまのなされたことなのだ」と。

女はそれ以後、これまで以上に懇ろに礼拝供養をしました。家は父母在りし日のように復したという。これ奇特なることなり。

あとがき

暖冬だったので春の花々の開花も平年より早いといわれており、各地の桜も彼岸明け頃には咲きはじめることでしょう。

境内でもご近所の方に頂いた沈丁花が本格的な春に先駆けて咲いて芳香を漂わせています。その傍らでは清らかな水仙が咲いては春近しと教えてくれています。

今月の表紙は四国霊場の本尊の御影ですが、春はお遍路の季節です。恒例の大島霊場一日参りを、四月一日に予定しています。詳細はお尋ねください。

そのお遍路とは無関係に朱印帳を片手に寺を訪れる人があります。それもインターネットで寺を知ったと、遠方から…。

その朱印帳には奉拝と書かれています。遍路の御納経帳には例外なく奉納と記されています。それはお札所に般若心経などの写経を納めたことの証でもあり、単なるスタンプリー的な朱印帳と納経帳とは似て非なるものですが、著名な寺社の仲間入りをさせていただいたように面映ゆいおもいもあります。

何はともあれ、縁ある人も無き人も好き日々、良き春であつて欲しい。新入学の子供たちの晴れ晴れした笑顔を目にする日ももうすぐである。

発行者

高野山真言宗

宝池山 龍門寺

吉岡光昭



何事も

己れ種まく

苦楽なる

嬉し恥ずかし

人生遍路

岩国市通津 3634 番地 3 ☎740-0044

高野山真言宗

寶池山 龍門寺 発行

☎岩国 (0827) 38-4611 番